

国語教師・青木幹勇の形成過程（6）

—授業研究で鍛える（2）—

茨城大学 大内善一

キーワード：青木幹勇、力量形成過程、授業研究、公開研究会、出張授業

1. 研究の目的

国語教師はどのような道筋を経て国語教師としての専門的な力量を形成していくのであろうか。この問いに答えていくことが本研究の目的である。研究の対象には、一人の国語教師・青木幹勇という人物を据えた。青木幹勇の国語教師としての生涯にわたる歩みを辿りながら、国語教師としての成長過程・力量形成過程を明らかにしていこうとするものである。

青木幹勇は、大正15年10月に教員検定試験に合格し、19歳で宮崎県高千穂小学校に赴任してから昭和47年3月に東京教育大学附属小学校を退官するまでのほぼ半世紀余を教師として勤めている。昭和期の大半を教師として過ごしていることになる。青木は、附属小在任中の昭和45年6月より授業研究サークル「青玄会」を結成している。翌年7月には同会の機関誌『国語教室』も創刊して自ら編集の任に当たり、平成12年7月に350号を数え、8月に最終号を発刊して終刊を迎えている。また、附属小退官後は全国各地の研究會に招かれて現地の児童を相手に実地授業を公開してきた。

青木幹勇が卓越した国語教育実践者であったことは、『青木幹勇授業技術集成』全5巻をはじめとする数々の著作を通して国語教育界に広く知られている。発表者自身も青木の実践研究から多くの示唆と啓発に与ってきた。その国語教室実践の営為に関しては、「青木幹勇国語教室の『書くこと』に関する考察-『書くこと』の導入から『第三の書く』への発展過程-」（全国大学国語教育学会編『国語科教育』第45集、1998年3月）と題して考察も加えている。この考察においては、青木が自らの国語教室の読解学習に「書くこと」という言語活動を積極的に導入して後、20年程の歳月を経て、「第三の書く」という刮目すべき実践理

論へと発展させていった過程を辿り、その国語教育実践理論としての意義を明らかにした。

青木幹勇の国語教室における極めて息の長い実践研究は、一人の国語教師の営みとしては稀有な出来事である。それだけに、青木の国語教師としての歩みは、「教師のライフ・サイクルへの視野」（望月善次「国語科教育学における教師教育の困難性」全国大学国語教育学会編『国語科教師教育の課題』1997年7月、明治図書、47頁）を踏まえた国語科教師教育の研究にとっても貴重な拠り所となっていくはずである。

したがって、本研究の意図は、青木の国語教師としての成長過程・力量形成過程を昭和期の国語教育史の流れに沿いつつ、多面的に捉えていこうとするところにある。一人の人間としての国語教師が具体的にどのような経路を辿って専門的職業人としての国語教師に成長していくかを明らかにしようとするものである。

なお、本研究に関しては、過去の本学会においてもすでに5回の発表を行い、その成果については前回の第116回学会要旨集に掲げておいたのでここでは省略に従う。

本発表では、前回の発表に続いて青木幹勇が行ってきた「国語科授業研究」との関わりを辿り、青木の国語教師としての成長過程・力量形成過程について考察を加えていくことにする。前回は昭和戦前期において青木が行った授業研究に限定して考察を行った。今回は昭和戦後期に入ってから昭和47年3月に東京教育大学附属小学校を退官するまでに青木が行ってきた主要な「国語科授業研究」に限定して見ていくことにしたい。

対象とする文献は青木が主宰して発行していた「青玄会」機関誌『国語教室』に掲載されていた「わたしの授業」である。前回は昭和戦前期の実践について述べられていた第1回から第57回までを見てきた。今回は戦後期の東京教育大学附属

小学校退官までの実践について述べられている第 58 回から第 101 回までの「わたしの授業」を中心に見ていくことにしたい。

2. 長編童話「五十一番目のザボン」の読書指導

昭和 22 年の 4 月から青木幹勇は 1 年生を担当している。この年の暮れに東京教育大学附属小の国語部は石森延男の奨めにより満州から引き上げて来ていた山口喜一郎を迎えて研修会を開いている。この研修会の折に青木は山口に授業を公開する約束をしている。青木が授業を公開したのは昭和 23 年 2 月 14 日であった。教材は『こくご』(二)にあった五「おはなし」である。青木にとっての戦後初めての研究授業であった。

以来、山口は亡くなる昭和 27 年まで足かけ 5 年間何度となく青木教室の授業を参観に来校している。青木によれば、山口には当時「アメリカの国語教育論に対する強い批判、対抗の意識があった」ようであり、それは山口の「言語教育論」が「どちらかという、西歐的であり、思索的、哲学的であったから」とのことである。

さて、青木は戦後初めて担任した 1 年生を昭和 22 年から 28 年まで 6 年間持ち上がっている。この 6 年間持ち上がりは青木にとってただ 1 回限りの体験だったとのことである。

この子ども達が 5 年生になった 3 学期に青木は与田準一が戦後いち早く書いた『五十一番目のザボン』という長篇童話を 6 年生の卒業まで約 1 年がかりで読み続けるという指導を行っている。240 頁ほどの本を正規の国語以外の時間、放課後の 15 分か 20 分を充てて子ども達と読んでいくという指導である。この実践は雑誌『言語生活』に取り上げられて、当時国立国語研究所所長だった西尾実が参観に訪れている。西尾は記録者として法政大学教授だった高藤武馬を伴ってきた。

武藤の記録には、「青木先生がこの作品を取り上げた動機は、まとまったものを一つ、みっちり読むことによって、通読から精読、さらにテーマの展開をつかみ取る力を養おうというためのところみであった」と記され、「先生は、文学作品を読むことによって、社会主義的ヒューマニズムを体得させたいというもくろみもあった」と記されている。続けて、「『五十一番目のザボン』とい

うかなり特殊な作品を取り上げるところにも考えてみなければならない問題もあろうし、学習が終始、先生対生徒の対話調で進められ、クラス全体の討議にまで発展しなかったというところにも、六年生としては問題が残るだろうが、ともかく、学習資料としてのテキストの欠陥を補いつつ、新しい国語教室を創造していこうとする先生の意気は、大いに買わなければならないだろう」と述べられている。

3. 古田拓との二人三脚による出張授業

戦後期における青木幹勇の「国語科授業研究」の場合は、校内での公開授業は勿論のこと、附属小教官であったことから、学外での研究会などに招かれての出張授業の場が多くなっている。

戦後最初の出張授業は昭和 25 年の 5 月に山形県の赤湯温泉に隣接する長井という地区での授業、続いて、翌 26 年 2 学期に兵庫県姫路市の船場小学校でも授業を行っている。この船場小での授業は、東井義雄が参観していて、氏からの高い評価が得られたとのこと、以来、東井との交流もあったようである。この授業で青木が心掛けたのは、山口喜一郎から教えてもらった「授業における子どもの発言のとりあげ方、ないし話のさせ方の指導」であったとのことである。

また、この姫路での研究会の帰りに淡路島の洲本第三小学校校長・石戸重夫から突然研究会への招聘があり、ここでも青木は授業を行っている。

昭和 27 年頃からは、各地の学校や研究会に招かれることが多くなる。同じ場所に毎年のように出掛けることもあり、それらのうち、京都市で行われていた国語研究会には、昭和 30 年 5 月に開催された「全国国語教育研究大会」を皮切りに以後 4 回、通算 5 回出掛けている。この大会は規模も大きく、多くの講演者を招いて様々な問題について話をしてもらっていたとのことである。

こうした研究会の中でも、特筆すべきは、出雲地方で開催されていた国語教育研究会に古田拓と一緒に招かれたことである。この研究会には毎年古田拓と共に昭和 30 年から 44 年まで都合 13 回ほど出掛けていくことになる。

この研究会の日程は、毎年 2～3 日間かけて同一のクラスを続けて指導していくというものであった。古田拓と共に行った授業はほとんどが「読

解と作文」である。青木によれば、「あれこれと、いろいろなくふうや、こころみをしてみましたが、快心の授業というのは、ほとんど得られなかったように思います」とのことである。しかし、青木にとってはこれが「まことにありがたい、授業鍛錬の機会」となったと言う。

毎回のプログラムは、「1 地元の先生方の授業、2 地元の先生方の研究発表、3 授業や発表を話題にした学年別協議、4 古田先生とわたしの授業、5 古田先生とわたしの講演」となっていた。このプログラムに対して、青木の方から「みなさんの中には、わたしたちの授業に対して、いろいろな質問・疑問・批判があると思う」と述べて、「まず、わたしと古田先生とで、お互いの授業を、ここで徹底的に批判をし合う」ことで、「お互いの授業の長短・成否を確かにする」とともに、できるだけ会員の皆さんの代弁もつとめる」ことにしたいとの提案が行われている。古田との歯に衣着せぬ徹底した議論はこの研究会の呼び物となって会場の先生達にも歓迎されたようである。

昭和 43 年 7 月の研究会は古田と同行した最後の研究会となり、この時には、広島大学の野地潤家も参加して、3 人揃っての授業と議論が展開されたとのことである。

4. 校内での授業研究

(1) 内地留学生との交流を介した授業研究

昭和 30 年頃から附属小学校の青木教室には当時の文部省を介して沖縄政府からの派遣留学生が毎年のように訪れていた。教職経験も豊富な優秀な教員達であったので、青木の方から特に指導するということがあまりなく、むしろ「助手代わりとなってくださってテストの採点、出張時の学級管理、それに骨の折れる夏休みの宿題調べなど」の手伝いをやってもらったとのことである。しかし、一日中身近にいて青木は自分の授業を見せてやっていたと思われる。やがて、沖縄との交流も行われるようになり、青木も昭和 38 年の夏休みに沖縄の国語教育研究会からの招きで出掛けている。その時の同行者には、石井庄司、倉澤栄吉、簗手重則、大村はま等の面々がいた。

また、昭和 43 年から 44 年にかけて、大学紛争が吹き荒れ、学内の研究・教育が一切停止する中で倉澤栄吉の下に来ていた内地留学生に毎週 1 時

間授業を参観させている。これは青木にとって少なからぬ負担ともなったようであるが、青木は「むしろふだん着の授業をしながら、自分の授業能力を高めることができた」と、リラックス・ムードでのぞむことにしたと述懐している。

一方、留学生は倉澤の指導の下で、「上位・中位・下位とおよその、ランク付けのできる子ども」を対象に 1 年間観察記録を取っていくということをしている。青木はこの「留学生の報告は、わたしにとっては、かなり深刻な反省資料」となったとして、昭和 45 年の『国語の教育』という雑誌にこの「授業参観記」が発表されている。

こうした内地留学生の授業参観は、昭和 44 年度からの 5 年間で約 100 回に上っている。授業参観の後の協議会も手ごたえのある話し合いとなったようである。そして、この 44 年度の留学生達との縁が青木が長く主宰していくことになる「青玄会」誕生につながったとのことである。

(2) 公開研究発表会での「観察記録」文の指導

昭和 29 年に青木は「観察記録」文を書かせる指導を行っている。2 年生の子ども達を担当した時である。1 年生の時の「理科の指導」がお粗末だったことの反省から「理科の教科書にのっている『季節だより』を書かせる」ことを思いついたこと、そのために「ものをよく観ること、観たことをそのまま書く」こととを結びつけて、「素朴な観察記録」を書かせる指導に取り組み始めている。「記録用の用紙」を作り、これを各自に持たせた「中型のスクラップブック」に貼り付けさせるという趣向である。スクラップブックは 50 頁あったので、年間の目標を 50 枚とさせている。用紙の上 3 分の 1 が絵、下 3 分の 2 に文章を書くのである。

さらに、5 × 10 の方眼紙を作ってスクラップブックに貼らせて、1 枚書いたら方眼の目を一コマ塗ることで「子どもたちの学習意欲をかきたたせる刺激剤」となることを企図したのである。記述の仕方は「簡条書き、書き流しいずれでもいいことにし、絵は全体を書くだけでなく、部分を拡大してかくこと」も指導している。

この実践に取り組んで 2 か月の 6 月 7 日の公開研究会で青木は、この「観察記録」の指導を公開している。「理科と作文の関連・よく観て書く・よく観ることが、書くことの視野を広げる」こと

を狙いとした実践提案であった。

以上は青木が取り組んだ作文指導の一端である。青木は、教員駆け出しの頃、宮崎県の小学校で生活綴り方の第一線で活躍していた木村寿の感化を受けている。青木は戦後しばらくは話しことばの指導や読むことの実践研究に熱中していたのを、やがて昭和30年代後半に入ると、作文指導に「教師生活最後の火花を散らそうと、大いに意欲をもやし」始めたのである。この時、青木は50歳になっていた。

(3) 初等教育シンポジウムでの授業公開

東京教育大学附属小学校で毎年行われてきた全国公開は6月と秋に開催されていた。昭和46年11月の公開では、従来の協議会形式の運営からシンポジウム形式に転換している。校内の部会を中心とした運営方式を改めて、学外から講師を招いてシンポジウムを開催するという趣向である。テーマは「読書指導の理論と方法の開拓」であった。このテーマを巡って二日間の論戦を目論んだのである。5人の学外講師は、古田拓・西郷竹彦・倉澤栄吉・亀村五郎・椋鳩十という面々であった。

真っ先に古田拓と西郷竹彦が選ばれたのは、1年半ほど前に出版されていた『冬景色論争一垣内・芦田理論の検討』の続きをやってもらい、そこに倉澤栄吉にも加わってもらうことを企図したからであった。この三つ巴の論争のネタ、仕掛けのために授業者を青木が引き受けることになる。授業は「大造じいさんとがん」を取り上げるようになっていたので、原作者の椋鳩十もゲストに選ばれ、さらに読書指導の実践で豊かな実績をもっていた成蹊小学校の亀村五郎にも加わってもらうことにしたとのことである。

青木が行った「大造じいさんとがん」の授業の詳細は、当日の発表に譲ることとして、大会での授業は「第四節、大造じいさんが、健康と体力と気力を回復した残雪を放してやる場面」が指導されている。

5. 全国国語教育研究協議会での「実験授業」

戦後、附属小在職中に青木幹勇が大きな研究会で行った公開授業はいずれも全国国語教育研究協議会でのものであった。①昭和38年の奈良大会、②昭和40年の松江大会、③昭和42年の宮崎大会、

④昭和44年の浦和大会である。

最初の奈良大会では、奈良学芸大学附属小学校で第5学年「こけし」の読解指導が行われている。青木の担任学級でまずこの教材を読ませ、奈良の子ども達にも「(1)教わったこと(2)作者にたずねたいこと(3)気に入ったところ(4)こけしについての(わたしの)感想」を書いてもらい、奈良の子どもと東京の子どもがこの教材をどう読んだかを1枚のプリントにまとめておいて、二つの地域の子どもと一緒に勉強している格好に仕組むという趣向にしたのである。

翌々年の松江大会では、島根大学教育学部附属小学校の第4学年で伝記教材「牧野富太郎」が取り上げられている。

次が昭和42年の宮崎大会である。宮崎県は青木が教員生活を始めた場所である。授業は宮崎市立宮崎小学校の第3学年で教材は説明文「日本にはなぜ木で作った家が多いのか」が取り上げられた。指導の際に青木が配慮した点は、教材の中の「問題の明確化」であった。「日本には木造の家が多いがそれはなぜか」という問題を意識させて、「そのわけを知ろう、知りたいという読みの動機をもたせ、読んでわかろうという意欲をもたせる」ことを狙いの第一においている。

そして、4度目は昭和44年の埼玉大会である。対象学年は埼玉大学教育学部附属小学校第4学年。この時も説明文教材で「星座の話」が取り上げられている。この指導で工夫された点は、「説明的な文章の読解指導にも情緒的な側面への関連を」ということであった。飛び込み授業であるから、「あれもこれもと手を広げると失敗するに決まっていますが、この教材に関しては、単なる知的理解を越えた、こんな指導も望ましいのではないか」という提案もされていた。

以上は青木が全国国語教育協議会で行った実験授業である。もう一つ、青木は昭和42年の宮崎大会での授業が終わった1週間程して、「芦田先生十七回忌記念教壇研究」という会での提案授業を行っている。芦田恵之助一門の授業者、古田拓・岩瀬法雲らとの授業であった。この授業でも教材は第5学年の説明文教材「車が發明されるまで」であった。

以上の授業はいずれも飛び入り授業である。詳細については、発表の中で見ていくことにする。